

# ラマ教と十七世紀の東アジア政局

祁美琴（人民大学）

## 発表要旨

---

16世紀後半、北元モンゴル国の政治的分裂に従って、仏教は再びモンゴル地域で復興した。1578年、チベット黄教の指導者ソナムギャムツォがアルタン・ハーンと会見した後、ラマ教によるモンゴルの征服は数百年にもわたり、モンゴル・チベット・明清朝廷ないし東アジア政局全体に影響を及ぼした。十七世紀初期まで、東アジアの政局は全体的に不穏であった。明とモンゴルの対抗や明と後金（清）の決戦、チベット黄教の危機でダライ・ラマ五世の要請によるグーシ・ハンの入蔵、内外モンゴル諸部の分裂と統一、また清に従属する問題をめぐる大規模な戦争、都を北京に定めた後の清とチベット・ジュンガル及び鄭氏・三藩など諸政治集団との対抗など、この一連の王朝交替、政権闘争、民族対抗の裏側に、いずれもラマ教の影響が見られる。本稿は、この治乱興廢の過程において、ラマ教の勢力がいかに大きな政治勢力として、対抗もしくは迎合し、自発的あるいは受け身的に多角的な関係に入り込んでいったのか、また、「藩を御する具」とされながら、いかに歴史の「主役」として、十七世紀の東アジア政教関係を形作っていったかを考察したい。

## 略歴

---

〈祁美琴/Qi Meiqin〉

中国内モンゴル自治区オルドス市生まれ。1987年中央民族大学歴史系卒。1996年博士（歴史学）。中国人民大学清史研究所教授、雑誌『清史研究』編集長。研究分野は清朝政治史、辺疆民族史。研究成果は主に内務府および三旗包衣団体の特徴、清朝辺疆管理、清朝の王朝特性などの問題に集中する。